

有名キャラ官能小説CG集第405弾!!



みゃーねえは男性経験ないんだぞ!!

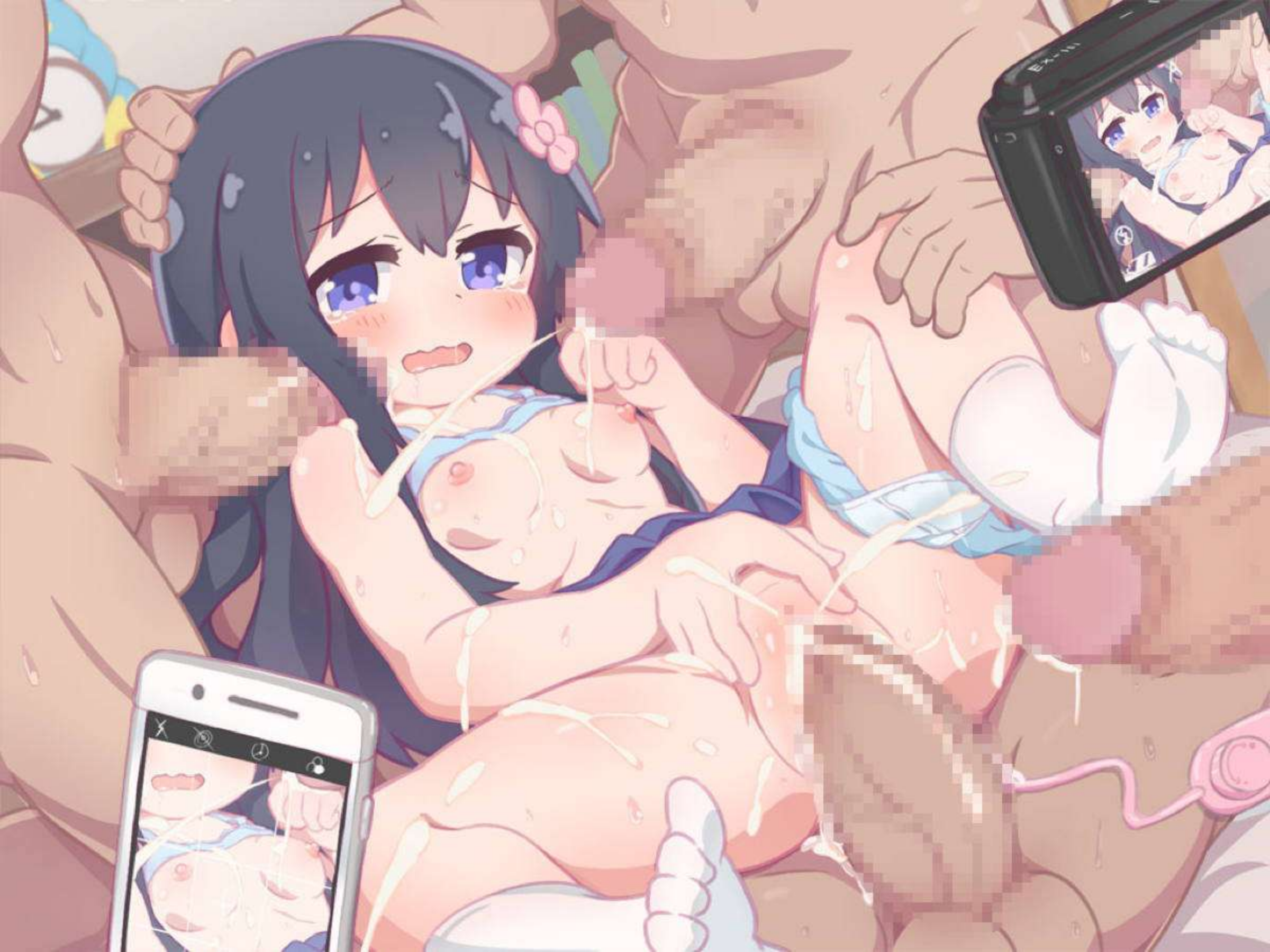
私。天使が舞い降りた!

はるはるCG集























ドグッ！！ ドグンツドグンツ！ ゴブフツ！！！！

「はー、はーっ、んはっ、はふ…う、ふう、ふう…、や、やっど…」

やっど一人——それは絶望的な現実だった。

「んはっ！！？ ちょ、ちょっとおっ、そんなのムリムリムリっい！！」

小依が思いっきり肉棒をねじ込まれながら、軽く泣きベそをかいている。

「んっ、んんっ！ …お、大きくて…はあはあ、こじ開けられて……はあ、はあっ」

男根の凄さを体感し、うわ言のようにつぶやく乃愛。

「うぐ…うっ、こ、んなに…キツイ、なんて…。うっ、う…あっ、ふぐんっ」

ピストン運動に花は全身が持っていかれそうになっている。

「うおおおお！！？ な、なんか熱い、お腹がすごく熱いのがプリプリしてるぞー！？」

人生で初めての中出し射精を受けて、驚愕と不思議な感覚に戸惑うひなた。

「(ゴメン…みんなゴメン…)」

守れなかった天使たち。否——はじめからこうなる事は致し方なかった。

一人で男達全員を満足させるなど到底間に合わないし、

彼らがひなた達にも最初から手を出すつもりでいることは明白だった。

「ひぐうっ！！？ さ、さっき終えたばかりなのにもうっ…あっあっ、うっ、うううっ！！」

新しい肉棒がやってくる。マンコの中めがけてやってくる。

子宮を突いて、やってくる。中出しするためやってくる……

「はあっ、あっ、んあっ、うっ！ んんんんっ、ふあっ、はあっあうん！！」

二度目ともなれば多少は慣れたのか、みやこの膣はチンポを柔軟に滑らせ、動きによく応じる。

相手や状況など身体には関係ない。生物としての繁殖行為、その機能に忠実に従うだけである。

「はあっ、ああんん！！ お、お願い…っ、しますっ、から…っ、もう、これ以上…この子たちにはっ…」

自分だけでいい。自分はどうなっても構わないから。

ありきたりではあるが実際、このような状況に追い込まれたらそれくらいしか懇願の言葉は出てこない。

だが、みやこの願いが届かない事は、発した本人がよく分かっている。お決まりのパターンなのだから。

「あっあ、んああっ、ま、…また中にっ、ひいいい…っ、あ、赤ちゃんできちゃっう…っ！！」

ビュドグググッ！！ ドクンツ！ ドクツドゥッ！！！！

まさか、お菓子に盛られるとは思っていなかった。まさか狙われているとは思っていなかった。

平和な日常は、かなり前から男達に監視されていた。

襲撃——そして、強姦。

シンプルにして分かりやすい、しかして重き罪を犯す者達によって、彼女らの日常は一変してしまった。



カシャカシャカシャッ！！

「おー、みやこ姉っ、まだ写真撮るのかー??」

妹の問いかけにも気づかないほど、みやこは今、夢中になっている。

「…うん、目が怖いけど面白いし。…ま、いっか☆」

乃愛もみやこの様子に多少引いてはいるものの、状況を楽しんでいた。

唯一、花だけが哀しみと絶望感にまみれている。

「い、いい加減にしてくださいっ、うう…こ、これは犯罪ですっ。

乃愛もひなたも、どうしてそんな事されて楽しそうなんですかっ!？」

言われた二人は、顔を一度見合わせる。

そして、むしろなんで花が嫌なのか分からないと言わんばかりの表情を浮かべた。

「えー、だって面白いもん。ねー、ひなたちゃん」

「股の中、最初はちょっと痛かった！ けど今はなんか慣れたし、ちょっとフワフワして面白いっ!!!」

これだ。これが花の絶望———周囲に仲間なし。

実の姉にアソコをパイプで貫かれて面白がってる妹に、それに追従する友達。

「(あ、ありえない…どうかしてる、こんなの…)」

お尻にはアナルピース、クリトリスにはローター、そしてまんぐり返してアソコを開いての撮影…

そんな事をするのも論外だが、それを許容する友人達もどうかしてると思うのは当然だった。

「はぁ、はぁ…ううっ、こ、こんな…ぜ、絶対に問題になりますよっ」

だが、そんな事を言われてもみやこはというと…

「ハァハァ、だいじょうぶ！ 花ちゃんってばこんなにカワイイんだから！」

「何がですかっ!! 意味がわかりませんっ!!」

論理的でなく、無根拠な謎の自信。

花は呆れ果てるというよりも、もはやだれかコイツをぶん殴ってくれといった心境だった。

結局、三人は大人のオモチャで何度かイカされるまで愛でられるハメになった。

その後、花が然るべきところにみやこの所業を訴えたかどうかは不明である。



「うっ…、なんですかこれは？ 毎日ちゃんとあらっているのですか、まったくもう」

「はは、ごめんよお花ちゃん。でも花ちゃんがキレイキレイしてくれるから、助かるよ…フフ」

男はほくそ笑んだ。どうやら上手く行っていると自信を深め、ゆっくりと花の身体を下へと押し込む。

「くうっ！ …ここで洗うのは、やはりキツイですね…。後でお菓子をごちそうしてもらいますから」

女の子の大事なところにペニスを埋もれさせられているというのに、

まるでそれが当然のような態度。

そして、乃愛とひなたもそれをおかしいとはまったく思っていなかった。

「ふふん。こんなモノ、さっさと洗ってあげましょー！」

それどころか、乃愛もノリノリだ。

大胆にも後ろから挿入しようとしている男の股間に自分からお尻を押し込む。

「おおっ！？ 勢いよく入ったけど、大丈夫かい？」

「…～っ、だ、大丈夫。このくらいっ、…私にかかればっ、この…とーりっ、えいえいえーいっ！」

乃愛はズコバコと高速に腰を前後させる。

ありがたくはあるが、男は無茶しないか心配になり、むしろ思い切って腰を叩きつけ辛くなってしまった。

「乃愛みたいに無理をするつもりはありませんが、長びくのは嫌なので、こっちも早くします」

すると花は、軽く数センチ腰を浮き沈みさせた。だが――

「(こ、これわあああ！？！？)」

見た目に派手さはない。しかし花の膣は、複雑怪奇に男の肉棒をしゃぶりねぶり、

外からでは決して分らないうごめきでもって、男根を搾り上げた。

「(まさかっ、催眠にかかりながらもこれほどの真似をっ！！？ い、いかんっ)」

イってしまう。

男は咄嗟に耐えようとした。その時――ドチュンツ！！

「あ、失礼…足がすべりま――」

ドグドグドグドグドグドググッ！！！ グモモモモッ！ ギチュチュウウツ！！！

男は射精してしまった。

しかも花の子宮へギッチギチに精子を詰め込む量は、男の全精力。

男は情けなくも、1発で終了してしまい、仲間にバトンタッチするもその後、花により次々とヌかれていく。

男達の想定よりも遥かに早く、楽園の庭先プールの時間は終了した。



寄り道、というものはなぜか不思議な魅力を持っている。
普段通らない道、あるいは行った事のない場所など…
その入り口の前を通り過ぎる時、ふと何気なく気になってそれしてしまう。

「あっ、あっ、うう——！ も、もう無理いっ、や—め—てえっ！！」

乃愛がいよいよと左右に首を振るう。
だが男のペニスは彼女の下着をズラしてそのマンコにしっかりとハメられたままだ。

「はぁ、はぁっ、ううう…んっ！ …ま、まだ続けるんですか?? こ、こんなの…犯罪…です、ぐすっ」

もう泣きべそをかいて久しい花は、流す涙も尽きてきたのか、逆に平静にかえりつつある。

「うぐぐぐ……もう股がヒリヒリしてるんだぞ。そのおチンチンズポズポ、いつまでするんだー??？」

いつもの元気が失せ、ポジティブな態度を維持できなくなったひなた。
その泣き顔は、不安と怯えの色が濃くなってきている。

…本来なら、さして何もない寄り道。悪いことがあるとしても、多くは迷ったりする程度で済む。
だが…この時の3人は、寄り道の先によからぬ男達の領域へと踏み込んでしまったのだ。

「おおっ、おうっ、ふぐっ、んおあっ！ …は—、は—っ、もうお腹のなか、ぐちゃぐちゃだー…」

ひなたの膣は、犯され続けてすっかり柔らかくなって、一端の女のデキ上がりをなしている。
だがそれはあくまで身体の話。心は暗く、不安と恐怖と後悔、そして自責の念に埋め尽くされてゆく。
寄り道を提起したのはほかでもない彼女だ。

——もしあの時、大人しく通学路をそのまま帰っていれば花も乃愛も、そして自分もこんな目には合わなかったのに。

「(ごめんな、花、乃愛、本当にごめんなっ)」

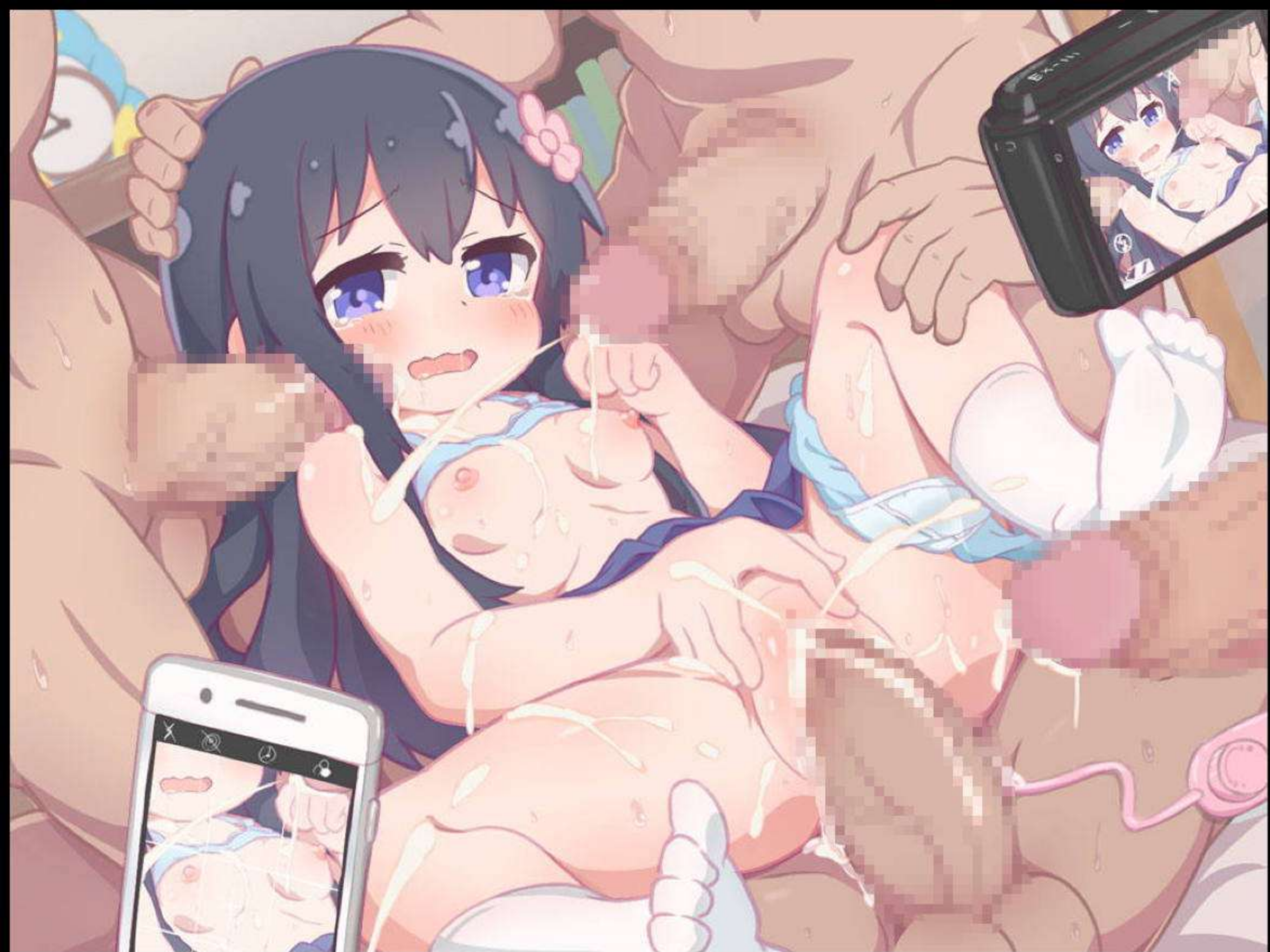
言葉にして謝るのが怖くて、二人の怒られたり、見放されたりするのが怖くて……
あのひなたが、完全に怖気づいていた。

危険な男達の性欲を叩きこまれ続けて、その爛漫たる精神が陰ってしまった。

「も、もういやだー！ またドビュドビュするの、やめて—っ、いやだ、それやだ—あっ！！！！」

ドグドグドグウッ！ ブルルッ！！ ブグチュルルッ！！！！

元より後ろ暗い住人達。怖れず3人を犯す…男という生物の、欲求のままに。
彼女たちはこの日、その心身にあまりにも深く、男というものを刻み込まれてしまった。



「無理…、こんなの…無理、なのに……どうして…」

強い嫌悪感が止まない花。

にもかかわらず、なぜかソレらを受け入れているという矛盾をなしている。

「さー、花ちゃん。おぢさんのチンポで気持ちよくなってねーえ」

「フヒヒ、可愛いねえ花ちゃんはあ…ハアハア。犯されてる姿もたまらないよっ」

「あんなちっこい穴に入るなんて、なんて羨まけしからん！ ふー、ふーっ」

ただひたすらに気味が悪い。気持ちが悪い。

中年男性の性欲の象徴が肉の塊となって、花の股をつんざき、向けられ、擦り付けてくる。

だが、なぜか花は、通報できずにいた。

何度もしようとするのに、彼らにその行動を阻害されているわけでもないのに、なぜか出来ない。

いや、やらない、という方が正しいかもしれない。

「(??? なんで…私…??)」

通報すれば一発だ。彼らはもれなく刑務所行き。100%言い逃れ不可能なこの状況だ。

自分の安寧と平和は約束された未来のはず…なのにそこに至れる行動を起こさない。

股に肉棒を深々と挿入されるまでの間もずっと、通報する機会などいくらでもあったはずなのに…

「うっ、うっ…ほっ、ほっお！ いいよおお、花ちゅわあんのオマンコ！ 最高だよおお！」

腰を振るい、花の中を堪能して気持ちの悪い喜悅の奇声を上げる。

何なのか？ 何故こんな事になっているのか？？

「うう、…やめ…痛いし…気持ち悪い……」

だが、そう言いながらも、花は奇妙な感覚を覚える。

あれ…痛くも苦しくもないような—————気がしてくるのだ。

「はぁ、はぁ…あれ、どうして私…、うっ…うんっ…こんな、カラダあつい…のっ…??」

いや、それもおかしい。熱いと思ったのは錯覚??

しかし息が不自然に上がる。

おぢさんの肉棒が彼女の膣を行き来するたびに、不可解な感覚は強まっていった。

「おあああっ！ キタキタキタァッ、花ちゃんの中に出すミルクキタァー！！」

「や…ダメ、やめて。そんなの汚い…出しちゃ…出しちゃだめだからっ」

ビュロロロッ！！ ドグッドグンッ！！！！

「いーや、出すね！！ ってもう出しちゃってるしね！！

あ〜…花ちゅあんにおぢさんの子供、産んで欲しいんじゃあ〜」

身の毛もよだつ事を言われ、花の全身をソワソワが駆け巡った。

「い、いやあ—————、気持ち悪すぎるっっ！！！！」



「こらっ、夏音におちんちん出し入れしちゃダメだったっ！！！！」

小依は一生懸命に男達に叫びかかる。
だが彼らに対するにはあまりにも無力で、
男は構わず夏音のマンコに自分のペニスを突き挿入していた。

「はっは、元気のいいヤツだな。お友達のことを心配してる余裕はないぞー？」

「や、やめてください！ はあ、はあっ、ぜえ…ぜえっ…、小依ちゃんにはなにもしないで…あうっう！！」

懸命に夏音が懇願してみても、男達は聞き入れることはない。
むしろますますやる気になって、彼女の中にその肉棒をより深くねじ込む。

「うううん！！ く、苦しい……はぁはぁ、ど、どうして…こんな事を…」

まだ夏音には分からないだろう、男達の悪性というものは。
こんな事をすれば警察に追われることになるくらい、彼女達にも分かる。
だが彼女達には、それを分かっているなお悪しき行動に及んでいる男達が理解できず、
それが一層不気味で、恐ろしかった。

「教えてやるよ、チンポとマンコはなあ…こーやって、繋がるためにあるんだぜ小依ちゃんよお！」

「ひいいい！！？ い、いだだっ、痛い、いたい——！？ やだ何コレっ、いたいいいっ！！」

小依の両脚がジタバタと暴れ出す。
だがすぐに男の手がそれを抑えて、身体が上下に揺り動かされはじめた。

「ほーら、これがセックスってえやつさ。君らのパパとママもやってる事だぞお、ほーれほれえっ！！」

「あっあっ、いいいいい、う、動かさないでよっ、いたい、いたいからあっ！！」

だが男はやめない。
それどころかますます腰を強く突き上げ、小依のマンコの奥深くを強く押し込む。

「ふんぐう！！？ うっ、うぶ…や、め…てえ、くるしい…うっ、う…あううう！！」

「くううう、キツキツなのがさらに締めやがるっ！！」

ビュロツ！！ ドグッドチュッドククンツ！！！！

中出しされたマンコは、容量不足ですぐにザーメンを吐き出してくる。
だが、二人にはまだ時間がたっぷりあった。
帰ってこない二人を心配し始めるまでの時間。
警察に通報し、捜索が始まるまでの時間。
そして捜索の結果として、たどり着かれるまでの時間——
犯罪をおかす者に、常識的な良心など存在しない。
異常なればこそ犯罪をおかす事に際して、怖れしなければ躊躇いもしないのだから。



自分の家という場所は、当人にとってこの世でもっとも安全な場所。
ましてや自室は、まさに己の絶対支配空間であり、最大限に心安らぐスペースであるはずだった。

「んんん！！ っうーっ、んううう！！」

だが、みやこは襲われた。
その口に、そのマンコにチンポをぶち込まれ、両手にも掴まされ、それでもなお余る。
それだけの男達が、この世でもっとも安全な自分の空間に突如、押し入ってきたのだ。

「んっ、ふぐっ、…んぶうう！ んぐっ、んぐっ、ふごふっ、むふぐぐぐむーうっ！！」

どんなに抗おうとしてみても、彼女の身体から離れるチンポは1本もない。
元よりそんな、異性に縁のあるタイプではないと自分自身でも理解していたが、
それでもこうして多数の男達に襲われ、その貞操を奪われる事には、幾ばくかのショックを覚える。

「悪いねー、みやこちゃん。ま…いい思いさせてやっから、そう嫌そうにするなって」

「ふー、ふーっ、んんんんん！！ んむっ、ふむふむううぐうぐ！？！」

涙が溢れそうになる。
自分を迎えに来てくれる白馬の王子様を夢見るわけではないが、
だからといって見ず知らずの男に犯されるを良しとするわけがない。

「んっ、んっ、んんうう！！ ふぐうぐぐぐっ、うー、ううーっ！！！！」

「聞いてた通り、いい身体してんじゃん？ もったいないよー、もっと俺らみたいなのと遊ばないとさー？」
震える胸は、十分に豊かだ。

奥深くを突き上げられるたび、ブルブルンと大きく乱れ動き、彼らの眼と手を楽しませる。

「おおお、そろそろ一発いっとくかー。んじゃ、みやこちゃんの中にこれから射精しまーすっ」

「ふぐうむうう！！?? うー、ううーんっ、んーっ！！！！」

ビュルルルルルッ！！ ドグググブウッ！！ ビューッビュビューウッ！！！！

胃とマンコの中へと、ザーメンが強制的に充填されてゆく。
みやこは息苦しさで下腹部に広がる熱と圧迫感による苦しきから、いつまでもビクついていた。

ただ一つ、彼女にとって不幸中の幸いであった事がある。
それは、男達は二度と彼女の前にその姿を現す事がないという事。
事の次第を、雇い主に報告した男達。
だがその雇い主がしっかりとその様子を見ていた事、記録していた事、
そして…男達が引くほどの変態的な一面を見せた事で、彼らはこれっきり関わらないようにしようと決めたのだ。
松本のこじらせた嗜好性が、みやこの貞操を穢させ、同時にその男達が二度と近づかない要因となっていた。



「はー、はー…はー…やったぞっ、いっぱい中出ししてもらったー！」

ひなたは、まるでスポーツ競技か何かで優勝でもしたかのように両手を上げて喜ぶ。だがその瞳にはどこか、いつもと少し違う雰囲気が宿っていた。

「むー…乃愛の時はもっと少なかったのにー。ひいきしてない、オジサン!？」

男は、乃愛に詰め寄られてまあまあと有める。

全裸の、自分の精液を付着させたコが怒り顔で迫ってくるのもまた悪くないと、彼は性欲を滾らせた。

「乃愛、次は私の番…順番は守って」

花が男の身体をツンツンと突いて催促すると、ベッドにコロんと寝っ転がって、大腿を開く。

自分を受け入れる気マンマン。

その態度だけでも男はジーンとして、そして我が事が上手く行っていると自信を深めた。

「ん……やっぱり大きい…。入る、かな…」

ちょっとだけ不安そうな花のマンコを押し開き、ペニスが進んでいく。

やはりキツイ。

が、ひなたと乃愛には挿入ったのだから、花だけ入らないという事はないはずだと、男は怖れず押し込む。

「…っ、…〜〜、はあっ！ はあはあ、すごい、…こんなに熱いんだ…」

お腹に男のチンポを収め、その感触と熱に花の表情がぼんやりとする。

男は腰を動かし、彼女の中を自分色へと染め始めた。

「っ、っ、あっ、おっ…んっ、はっ、ふっ、んっ、あっ、ひっ、あっ、あっ、んっ、なっ、はあっ、あっ、ん！」

声が上手く出せないらしい。

まだ苦痛はあるだろうが、子宮を突くたびに漏れ出る声にはどこか、艶やかなものが既に宿りかけている気がする。

男は、花には才能があるのかもしれないと考え、さらに腰を早めた。

その変化はあまりに拙速。なれど確かめたい、花のこっち方面のポテンシャルの高さを。

「ふあっ、んあ、ああっ、…あつい…っ、からだ、あっ、いっ…はあ、はあっ、あん、あっ、んっ！」

表情が、苦悶から喜悦へと変わりつつある。この短時間でこうも早く……

男は思わずゴクリとノドを唸らせた。この娘にはチンポの味を——自分の味を骨の髄まで覚え込ませたい、と。

「あっあっ、ピクピク!? オジサンのがピクピクってっ、あっあっ、んんんっ、ふあああああああ??!!」

ドゴッ!! ドゴボッ! ドフッドググウンッ!!!

キツチリと、確実に催眠術をかけよう。今後ともよろしくするために。

男は花の中に射精しながら決意する。

そして3人は、自覚のないままに定期的に男と“遊ぶ”ようになった。



「ハアハアハアハア…友達の誘いを断ってこんな事しちゃって、いけないコ達だ」

その片棒を担いでいる男は、ゴクリとノドを喰らせる。

股間を支配する快感は、並みではない——末恐ろしい女の子もいたものだと興奮を織り交ぜて感嘆した。

「んっむ…んっんっんっちゅっ、んぶっ、んんっ」

夏音は懸命に、しかし慣れた動きで男根を啜えこみ、頭を前後にふるっていた。

口内で絡みつく唾液と舌がもたらす快楽は、そのフェラチオを受ける当人にしか分からない幸福だ。

「早い子はこのくらいでもう経験しているのもいるとは耳にしたことはあるが、まさか本当にいるとは驚きだよ」

「ふんっ、もちろんナイショだから。分かってるわよねオジサンたち？」

小依も自信たっぷりにそう言っただけ。

だが、彼女は夏音と違って、実はよく分かっていなかった。

ただ夏音が、嫌々ではなく自ら積極的に行ってる様を見て、自分にもこういう事は余裕だろうとタ力をくくっているだけ。

パンツをズリおろされて股を開いているのも、夏音の真似をして挿入待ちのポーズを取っているだけに過ぎなかった。

「(なんだか知らないけれど、夏音があんな気持ちよさそうな顔してる事なんだが、きっと余裕よねっ)」

しかし——

ズッ…ン!

「ふんぎっ??! …い、え…、え? …な、なに…コレ…?? ちょ、え、えええ??」

「おや、キミは初めてだったのか。いやいやこれは光栄だ、オジサンが小依ちゃんの初めての男というわけだ」

だが男は挿入してすぐに動きだす。一切止まらずに、そのまま小依のマンコの開拓を進める。

「んぎぎい!!? ま、まってまってえっ、い、痛いって、なにこれ?? こんなに痛いなんて聞いてないわよ??!!」

「ハッハッハ、最初は痛いものだよ。お友達だって一番はじめはそうだったんだよ? でも見て見なさい、今はあの表情だ」

確かに夏音の表情には、痛みを感じている風には見えないし、ましてや我慢しているようにも思えない。

小依の頭の中は、なんでどーして?でいっぱいになる。

「なあに、オジサンたちの精子を何度も入れられていれば、そのうち最高に気持ち良くなってくるよ」

「そ、そうなの?? で、でも痛いのは…あぐっ、ううっ…んんっ、や、やっぱり痛いいい!!」

「仕方ないなあ…、じゃあ先に痛み止めを打ってあげようね、そおれっ!!」

ドグッ!! ビュグンッ! ドグドグドクッ!!!

それを胎内で受け止めた瞬間、小依はヒグッと息を飲んで全身を硬直させた。

子宮に精子を受け入れることを、彼女よりも彼女のカラダが理解していたのだ。

そしてそれがスイッチであるかのように、

小依の身体は男達に犯されるたび、快楽の園に向けて急速に女の悦びを感じられるよう整えられていった。